JAPANESE JOURNAL OF INFLAMMATION
EDITORIAL*New type antiinflammatory agents*
*Hajime Fujimura**

新しい型の抗炎症剤

藤 村 一*

炎症学会も本年7月に催された学術集会で11回の大会を重ねるに至った。しかも、年々参加者・演題数も増加する傾向にあることは誠によろこばしい。

それにつけてもクローズな研究会から一挙に発会式を兼ねた第1回大会を、カロリンスカ研究所の B. Sammelsson 教授を招待講演者として決行された塩川教授の英断に対して、改めて敬意と感謝の念を強くするしだいである。

さて、このようにプロスタグランジンからはじまったような日本炎症学会であるが、その後のこの方面の研究の進展はまさにすさまじいものがあり、この10年の間にプロスタグランジンおよびその誘導体の製剤が現に臨床利用されるに至っている。

しかし考えてみると、炎症におけるプロスタグランジンの役割は、アスピリンやインドメサシンのような、すでに臨床利用されていた非ステロイド型酸性抗炎症剤の作用機序の一端がプロスタグランジン産生酵素(主としてシクロオキシゲナーゼ)の阻害によるとされたことが、研究のスピードを加速させたことは否定しえない。そして、アラキドン酸カスケードのうち、リポキシゲナーゼ系の炎症への影響については、いまだに具体的な抗炎症剤の出現をみていない。その後、活性酸素(スーパーオキシド)が採り上げられ、さらに、種々のサイトカインが採り上げられ、これらの炎症との係わりについての研究が盛んであるが、やはり特定炎症疾患との結び付きとなると、なかなか困難であるのが現状である。

しかし最近、日本チバガイギーリウマチ賞を受賞された大阪大学の平野教授らのリウマチ発生機序、特に骨破壊と IL-6 との係わりに関する仕事があらわれたことは心強い。いまや、リウコトリエンや活性酸素も含め、炎症性インターロイキンの個々の産生抑制ないし拮抗作用はもちろん、できればこれらメディエーターに対する複合的な作用を持った新しい型の抗炎症剤の出現を期待してよい時期に来ているように思う。

* Division of Pharmacology, Research Institute For Production Development
生産開発科学研究所・薬理研究部門